

# 時代をリードする 未来志向の リーダーシップ論

グローバル・エデュケーションアンドトレーニング・コンサルタンツ  
代表取締役 福田聡子

## 第6回 「未来志向リーダー」育成実践 ～英語と自己改革編～

私はさまざまな年代・階層のビジネスパーソンに向けて、自分をグローバル・アジャイル・デジタル（GAD）な社会に適応させるためのマインドセット醸成に関する「パーソナル・グローバリゼーション」、そして、大人のための英語学習法「右脳型英語学習法」というプログラムを行っています。

今回は、「英語習得」に焦点をあててお伝えしていきます。

### 「英語ができなくてもいい」と思っている人は1人もいない

英語のワークショップなどの受講者は、英語が好きな人／嫌いな人、英語学習が楽しい人／苦しい人、英語を現在使っている人／いない人、年齢、職種、役職もさまざまですが、全員に共通するのは、「英語ができなくてもいい」と思っている人はいないということです。つまり、全員何らかの形で「英語ができるようになりたい」と思っています。ただし、習得に至るまでの道のりのなかで、「努力が実らない」といった理由により挫折をしているのです。

英語学習を途中で諦める理由は人それぞれです。例えば、「英語は嫌いではなかったし、できるようになりたいと常に思っていたけど、人生の優先順位では高くなかった」（部活、勉強、家族、就職、仕事、出産育児、介護、趣味など、人生は優先順位の入れ替えの繰り返しです）、あるいは、「1週間英語漬けの生活をしたけど、何かのきっかけでそのサイ

クルが崩れてしまって、そのままやらなくなった」など。あるいは、「YouTubeで面白い英語の動画を見つけるのは好きだけど、それだと「勉強」していることに入らない」と思い込んでいたり、「中学・高校で嫌いだった英語の先生の顔を思い出してしまうから」といったものもあります。

「やれない理由」は、ある意味、クリエイティブで、バリエーションもあります。しかし、「やる理由」は案外シンプルなものです。何かをはじめるとあたって重要なのは、①きっかけ、②決め、③継続できる環境づくりです。この3つがそろえば、新しいことを学び、継続することは可能です。そして、①と③は他者からの働きかけで可能になっても、②の「決め」ることができるのは自分だけです。自立的に自分で「やる」と決めた人をサポートすること、そして、その人がグローバル舞台で活躍しているのを見るのが、私の喜びです。そういう意味で私のプログラムは、英語という言語の学習法そのものというより、自立的に自分で決意し、自己変革を行う人をサポートするプログラムであると考えています。

英語を習得するプロセスをきっかけとして、自分と向き合い、自己変革を行ってきた人の笑顔や輝く姿を目の当たりにし、その人生に微力ながら少しでもよい影響を与えられているのではないかと考えるからこそ、15年以上続けてこられたのだらうと思っています。

## そもそもなぜ、英語から逃げてこられたのか？

そもそも、英語が苦手な人は、なぜ「英語なんてやらなくてもよい」と英語から逃げる事ができていたのでしょうか。それは4つの思い込みによるものです。

ここから先は少し耳の痛いこともあるかもしれませんが、それぞれについてみていきましょう。

### 思い込み①

#### 仕事でもプライベートでも英語なんて使わない

こういった言葉を聞いたことがあるのではないのでしょうか。「一念発起して英語学習をはじめたのですが、結局使う機会がなくて、勉強を止めてしまいました」。「使う機会がない」というのは、学習を継続しない「理由」トップ3に入る理由です（他は「時間がない・忙しい」「もっと簡単にすぐできる魔法を求める」など）。しかし、本当に英語を使う機会はないのでしょうか。

インターネットが浸透する20年以上前であれば、ある程度は本当だったでしょう。しかし2022年現在、オンラインレッスンやTEDやMOOCなど、英語に触れたり使う機会はインターネットを介していくらでもあります。「英語を使う機会がない」といった、学習を「他責」にはしにくい環境になっているのです。

### 思い込み②

#### 周囲もできない「安心感」

特に40歳以上の日本人にとっては、「他の人も英語はできないから」という横並び意識からくる安心感があるのも事実です。実際、社内の同僚、同業他社の状況を見ても、英語ができる人のほうが少ない、と感じる人は多いでしょう。

しかし、ホワイトカラーのなかで英語から逃げら

れてきたのは、世界でみても日本だけという特殊事情があります。この特殊事情のなかで「周囲ができないから自分もできなくて当然」と思い込むのは危険です。「今現在の自分の周囲」だけを見て判断するのではなく、GADの社会がどう変化しているのか、そこにアンテナを張っておく必要があります。

### 思い込み③

#### 「TOEIC」600点でOK！

「課長昇格のためにはTOEICで600点以上必要」など、昇格要件に英語アセスメントの点数が定められている企業は多いものです。この設定にはメリット・デメリットの両面があります。メリットはもちろん、全員がその点数を目指して勉強することです。デメリットは、「この点数に達すれば、英語は勉強しなくてもよい」というメッセージに解釈されてしまうことです。なぜそのような解釈が可能になってしまうのでしょうか。

それは、なぜ、英語を学ぶことが自分のキャリアに不可欠なのかという「Why」が抜けているからです。この連載で何度もお伝えしているとおり、GADの社会では、自分を常にアップデートし続ける必要があります、その要素の一つとして英語は不可欠です。しかし、この「Why」への腹落ちがない限り、「会社に言われたから仕方なく勉強する」というやらされ感のマインドから抜け出せず、会社が設定した点数をクリアすれば「一丁上がり！」と誤ってしまいがちになるのです。

### 思い込み④

#### 終身雇用・年功序列は今後も続く

こうした思い込みをもっている人は、だいぶ減ってきたように感じます。特に40代以下の層では、「終身雇用・年功序列が今後も続くというのは幻想だ」と思っている人の割合が増えています。実際、財界からも、終身雇用を続けていくメリットは少な

いという声が出ており、最近では、副業解禁や週4日勤務など、終身雇用・年功序列そのものに切り込まなくとも、その前哨戦ともいえるような制度が解禁されはじめています。今までの働き方、学び方とは異なる考え方が必要になっているのです。

これら4つの思い込みは、私が受講者からよく聞かれることでもあり、人材開発の担当者として、時代が変わったことを受講者に伝えられるよう言語化しておくことをおすすめします。

## 社員のやる気に火をつける 継続学習の全体像

図表は、社員のやる気に火をつける継続学習の全体像を表しています。やらされ感のままで新しいことをはじめて継続するのは、多大なコストがかかります。常に見張る必要がありますし、そもそも、それだけのコストと労力をかけても継続しないかもしれません。だからこそ、「自分が自分をやる気にさせる」ことが最もコスト削減につながるのです。そのため、図表にある3つのステップが必要です。

なぜ、変わる必要があるのかという「Why」の理解を担うのが「パーソナル・グローバル化」、そこから一歩を踏み出して、楽しい成功体験を積み、継続学習を促進するのが「右脳型英語学習法」、その後は、学んだことを手ごたえとして実感してもらうため、各社のニーズに応じたコミュニケーションスキルのプログラムを設計していきます。この順番で行うことが、受講者の継続学習を促すうえで重要です。

そのなかの「右脳型英語学習法」というプログラムは、以下の3つの要素から成り立っています。

要素1：英語の嫌な思い出をアンラーン（手放す）

要素2：「どんな自分になりたいか」をビジョン

図表 継続学習の全体像



グ（ビジョンを描く）

要素3：具体的な学習法の伝授と覚悟決めによって、小さな成功体験をつくり出す  
それぞれについて、みていきましょう。

要素1：英語の嫌な思い出をアンラーン（手放す）

私の趣味はトライアスロンです。トライアスロンは、水泳、自転車ロードレース、そして長距離走の3種目を連続して行う耐久レースですが、私は水泳が大の苦手でした。数年前までは25m プールを泳ぐので精一杯で、途方に暮れていたのを覚えています。そこで、私は水泳の練習に入る前に「アンラーン」というプロセスを行いました。

アンラーンとは、自分が経験してきたこと、自分の思い込みを意図的に「忘れる・手放す」ことを指します。私にとって水泳は「苦しい、進まない、できない」と同義語でした。この水泳に対する苦手意識をまず手放すことから始めたのです。もちろんすぐにできるようにはなりませんでした。水に入る時に今までよりも少しリラックスして入れるようになりました。そうして3カ月ほどすると1,500mが泳げるようになったのです。それ以来、トライアスロンが大好きになったのですが、トライアスロンという競技が好きになったというよりも、自分ができないと思い込み続けてきたことに対して、期限を

決めてできるよくなるというプロセス自体に夢中になったといったほうが正しいでしょう。

ある一定の期間を決めて正しい努力を、楽しく、継続的に続ける、という意味では、水泳も英語学習も成果の出し方は同じです。「苦手意識を克服する」と口で言うのは簡単ですが、実際に行うことは難しいものです。自分に合った壁への立ち向かい方をみつけることが大切です。

## 要素2:「どんな自分になりたいか」をビジョニング (ビジョンを描く)

現在の自分の英語力はいったん棚に上げ、「英語ができるようになったら何がしたいか」というビジョンを描いてもらうことは重要です。単に、「海外ドラマを字幕なしで観られるようになりたい」だけでなく、今後のキャリアのなかで英語ができるとどんなメリットがあるのかを具体的に考えていきます。

人はメリットがないと動きません。特に英語は、「やれと言われたから」や「できないより、できたほうがいい」という、やらされ感や Nice to have (あってもいいが、なくても困らない) 状態になりがちです。だからこそ、英語ができる状態になった自分がイキイキと活躍している場面を鮮明にビジョニングすることで、ゴール達成に近づきます。

## 要素3: 具体的な学習法の伝授と覚悟決めによって、小さな成功体験をつくり出す

英語をものにするためには、継続が必要です。継続といった時、人によってイメージはさまざまです。2週間でも継続という人もいますし、1年続けないといけないと思っている人もいます。私は、少なくとも半年から1年が必要だと思っています。そのため、自分が楽しんで行く必要があります。私たちの統計によると、英語学習で結果を出した人は、少なくとも1日1時間の勉強を半年~1年間、さらに、突出した結果を出した人は、1日2時間以上を

半年~1年間続けています。

「そんな時間は取れない」、そう言う人もいます。しかし、通勤時間や隙間時間など、有効活用できる時間は残っています。プログラムでは、タイムマネジメントというより、タイムクリエイト (時間をつくり出す) ためにはどうするか、という観点も伝えています。

じつは、「右脳型英語学習法」は、留学をしていない英語オタクの人たちにインタビューをして、どのような学習法が効果的だったかを聞いた内容がベースになっています。そのため、学習法自体は、おそらく「目からうろこ」のような目新しいものではないかもしれません。方法よりも、英語に対する苦手意識を払拭し、どうしたら成果が出るのか、それをどう継続していくのかを一人ひとりが考え、実践していけるような内容となっています。

自分ができないと思いつみ続けてきたことに対して、期限を決めてできるよくなるというプロセスは、自己変革そのものです。英語という小さなチャレンジを乗り越え、小さな成功を積むことを通じて、自分をGADの世界に適応させ続けるための自己変革の感覚をつかんでいただきたいのです。

リーダーは自己変革を常に続けていく必要があるからこそ、「未来志向リーダー」育成の文脈で英語に取り組むことは重要だと強く考えています。

\*

今回は、英語習得と自己変革についてお伝えしました。次回は、「未来志向リーダー」育成プログラムの企画・実施例を紹介したいと思います。

## PROFILE



福田聡子 (ふくだ さとこ)

ウイスコンシン州立大学卒。2000年に前代表の布留川勝と共にグローバル・エデュケーションアンドトレーニング・コンサルタンツ株式会社を設立し、各業界を代表するトップ企業を中心としたクライアント400社以上のグローバル&自立型人材育成に携わる。世界のどこにいても自分らしく輝き、さらなる成長を求め、磨き続ける人を育成することが信条。趣味はトリアスロン。